

私の卒業後、そして現況など

19期 棚岡充雄

はじめに

皆様こんにちは、時おり届く現役の活動のお知らせに接するたび、懐かしい思いになっております。私は現在、名古屋市に在住し、伊勢三河湾水先区の「水先人」として働いています。

土木工学科を出て、なぜ水先人？あるいは、そもそも「水先人」とは何？という方もおられると思いますので、まず「水先人」とは。

日本水先人会連合会ホームページから一部引用すると、「水先人は、船長の助言者という立場で船舶の操縦を指揮して船や港の安全を守る仕事で、日本の港湾や内海、海峡など多数の船が行き交い、また地形や水路が複雑で気象や潮流の状況が厳しい危険な水域において、それらの環境に精通していない外国航路を航行する船の船長を支援する」という内容になっています。

要するに、特定の港湾において、輸出入のために出入りする船に乗り込んで操船する仕事です。船長の助言という立場ですが、実際に号令を発して操船します。また、これは日本の会社の日本人船長の船であっても、水先人が乗り込むこととなります。国際条約や法令で決められていることなのです。

そして、私の仕事場は、名古屋港、豊橋港などと、伊良湖水道（渥美半島の先端あたり）との間を往復する海域ということになります。海域ごとに免状を取る必要があるのですが、当面は、ずっと名古屋に住んでいます。単身赴任です。

また、言葉として、水先案内人というのがありますが、同じ意味ととらえて良いかと思えます。「水先案内人」のほうが語呂いい感じはしますが、法律で決められているのは「水先人」です。

1. 海上自衛隊入隊

なぜ私が水先人になったかという経緯は、大学卒業後、海上自衛隊に入隊したことからの説明になります。

昭和60年大学を卒業し、海上自衛隊幹部候補生学校に入りましたが、

まず、一般大（自衛隊では、防大卒と区別するため「一般大」といいます）から海上自衛隊に入るにはどのような道があるかといいますと、様々な方法がありますが、私は幹部（士官）になりたかったので幹部候補生学校に入りました。これは広島県の江田島市（当時は「町」）に在り、帝国海軍の海軍兵学校があった場所で、明治、大正時代の建物を含め多くの伝統を引き継いで今に至っています。

幹部候補生学校では、防大卒業者とともに1年間を過ごします。

余談ですが、その後の経歴管理や教育において、防大と一般大との格差については、陸海空の中では海上自衛隊が最も少ないと感じます。一般大卒は、トップにこそなっていないませんが、多くの者が将官になり、また指揮官として活躍しています。あくまで私の感覚ですが。

さて、幹部候補生学校での階級は「曹長」で、幹部候補生という身分です。そしてそこを卒業すると幹部の最下級である「3等海尉」になります。

ちなみに、大学院を卒業してから入ると、この時いきなり「2等海尉」になります。

江田島は、我々にとって聖地とも呼べる場所ですが、荘厳という大げさかもしれませんが、独特な雰囲気を感じられる場所です。是非見ていただきたい場所でもあります。(海上自衛隊第1術科学校のホームページに見学の案内があります。)



〈江田島：第1術科学校全景〉

2. 幹部候補生卒業～遠洋航海

幹部候補生学校を卒業すると遠洋練習航海（以下「遠航」といいます）に行きます。

卒業式が終わったら、直接学校の沖に停泊している練習艦に乗り込んで、そのまま出港してしまいます。とは言ってもいきなり国外に行くのではなく、最初の1月半ぐらいは国内を回りながらの訓練と、伊勢神宮や各地の史跡などの研修をします。これは、我が国の歴史や伝統に触れてから外国を見る、という目的もあります。

私の遠航は、北米コースとあって、アメリカ、カナダを中心に加えてラテンアメリカの国々を回りました。寄港地は先進国だけでなく発展途上国もありますので、それはそれで刺激的です。

この年のメインイベントは、ニューヨークの自由の女神がフランスから米国に贈られて100年目を記念した国際観艦式への参加でした。

1986年ですね。

ハドソン川に錨を入れての停泊式の観艦式でした。細部は忘れましたが、多くの国から軍艦や帆船が参加し、合衆国大統領が乗った「戦艦」に敬礼したことは覚えています。当時は「戦艦」がまだ現役でしたから驚きです。

寄港中は、現地の人たちだけでなく、そこで働いている日本人の歓迎を受けたことなど、良い思い出が多くあります。寄港地のお祭りにゲスト参加してパレードしたこともありました。

3. 幹部として部隊などへ

海上自衛隊における経歴管理では、艦艇や航空機などに直接携わる「部隊」での勤務、海上幕僚監部や大きな司令部など陸上での勤務、そして、各種、各レベルでの教育を受ける期間（学校も海上自衛隊の中にあります）の3つに大きく別れています。

私の場合は「艦艇要員」で、その中でも「護衛艦」に乗り組む仕事が主となりました。

海上自衛隊には「施設」という職種があり、これは即ち土木の業務です。

遠航終了後、要員区分を決める時、人事の担当者から「施設」の希望はないかと確認されましたが、艦艇を希望する旨回答し、そのまま決まりました。艦艇希望者は比較的少ないこともありました。

艦艇での勤務は、最初のうちは船の運航を補佐するような仕事に就きますが、要するに基礎的なことを体得する時期です。

3年程そんな下積みの時期を過ごした後、徐々に責任の重い職に就いて行きます。また、この頃各自の専門職が決められます。それは、射撃、水雷、航海、機関などなど、より深い教育を受けることでスキルアップして行きます。私の場合職種が「艦艇用兵」という、何とも掴み処がわかり難いのですが、広く艦艇の運航や作戦行動に携わるという役割です。今では「艦艇用兵」というのは廃止になりました。専門と言い難いからかもしれません。

先にも述べましたが、ずっと艦艇に乗り込めるのではなく、陸上での仕事にも就かなければなりません。私の場合、人事関連の仕事に多く就き、地方での係長、課長、あるいは海上幕僚監部（会社で言えば本社のような）での関連業務がありました。

まあ、海上自衛隊の様々な事柄を知ること、本業である艦艇勤務にも活かされるのは間違いありません。

また、ここで言う地方とは、海上自衛隊の5つの大きな地方総監部のことで、横須賀、呉、佐世保、舞鶴そして大湊の5つです。

艦艇の大きな部隊も、この5箇所にありますから、この5箇所を数年単位で転勤して行くことにもなります。

転勤が多いので、落ち着くということはないのですが、子供が大きくなってきたころに現在の自宅である千葉に家族を置くことにしました。

東京勤務以外は単身赴任ですね。幸い家族も健康でいてくれましたし、私自身、単身は苦にならないので、問題ありませんでした。

約32年間の自衛隊勤務の内、約半分の15年ちょっとの間、艦艇での勤務となりましたが、これは長い方です。

指揮官の配置としては、護衛艦「せとぎり」「おおなみ」そして「こんごう」の艦長、最終配置は、舞鶴海上訓練指導隊司令でした。

総じて、海上自衛隊生活は充実した日々だったと感じています。
支えて下さった多くの先輩方や、家族に感謝です。

おわりに（自衛隊退官そして現在へ）

平成29年2月、私は自衛隊を定年退官したのですが、まだまだ働かなくてはならないので再就職です。

新しい仕事を選ぶ際、せっかく船を動かすスキルを得たので、これを活かしたいと考えていました。そして、自分には水先人に応募する資格があるということを知り、チャレンジするしかないだろうと決意した次第です。

受験資格は、総トン数3000トン以上の船の船長経験2年以上と、英語能力TOEICスコア500以上です。艦長経験は、そのまま船長としての経歴にカウントされます。

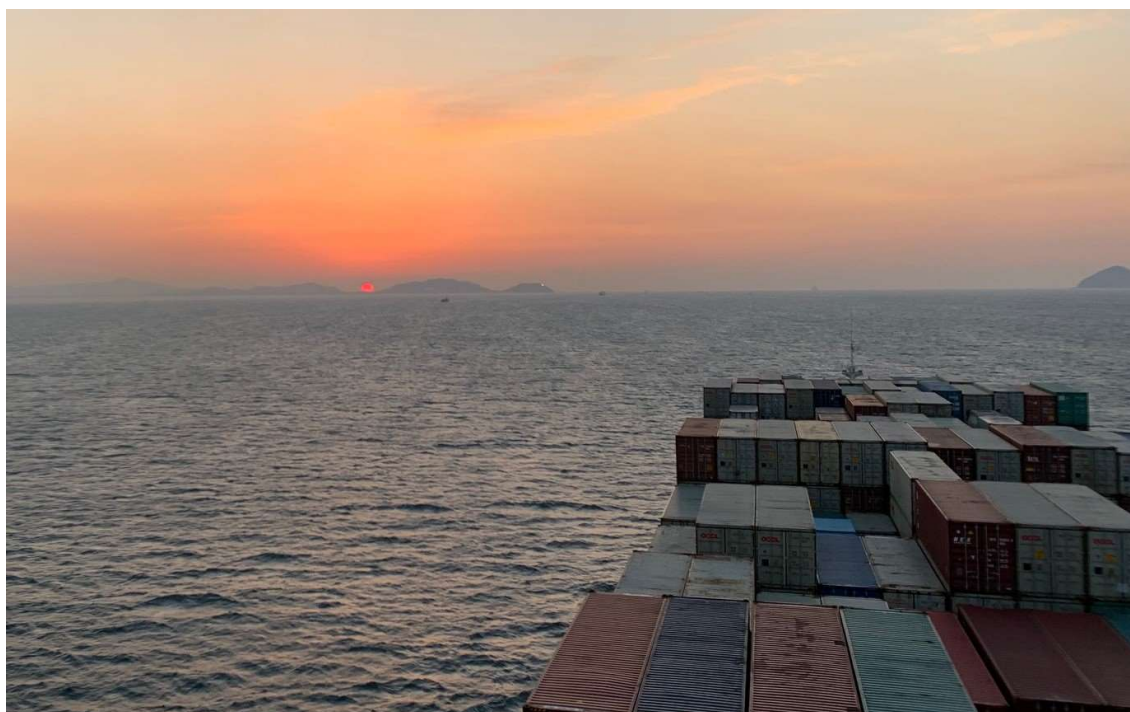
水先人というのは、商船出身者の世界であり、また一年生に戻って始めるという気持ちで飛び込みましたが、何とか受け入れてもらえました。

神戸にある海技大学校での教育、及び伊勢湾での実務研修（ほぼ看取り稽古）の後、国家資格（一級水先人）を取得し、平成30年2月に水先人として開業することができました。

ちなみに、自衛隊の艦艇は、国内の港では水先人は乗りません。初めて入港する港であっても艦長が入出港の操艦を行います。外国の港には現地の水先人を乗せます。

船を動かすのに土木工学は直接関係ありませんが、ベルヌイの定理など流体力学を実感できる世界でもあり、また、離着岸の操船は、船のエンジン、舵の効果と、タグボートの力、そして、風や潮の流れの影響、すなわち力のバランスを取ることが重要となる、物理学そのものであると感じます。

商船の世界では「水先人は、船乗りの最終形」と言われることがあります。この仕事に就けたことに感謝し、また、日本の海上輸送の末端を担っていると自負しつつ、今後も安全運航に努めてまいります。



〈伊良湖水道航路付近の朝日〉

皆様の益々のご活躍を祈念しております。

以上